

昭和二十六年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十六年四月二十八日運輸省特別授承認第三五二號
昭和二十六年七月廿五日印刷

浄土

第十七卷 第八號

八月號

秋風は吹く

吉田絃二郎

浄土信仰の本質

眞野正順

童話 ひつこし

高橋良和

渡邊海旭

知切光歳

1951

8

傘

朝のラヂオの天気豫報では、朝のうちは晴れ間も見えるが、午後になると雲が多くなつて、夕方からは雨になるから、外出の人は雨具の用意をなさるがよい、ということであつた。この頃の天気豫報は氣味の悪いほどよく當るので、科學的眞理の信奉者である私は、空がまだ晴れているにも拘らず、傘を携えて出かけた。

所が電車に乗つてみると、傘を持つてゐる人は一人もない。後生大事に傘を抱えているのは私だけなので、いかにも間が抜けていて格好が悪い。私は傘を持つてきたことを後悔して、少しむしやくしやし出した。街を歩いてゐる人の中にも、傘をぶら下げてゐる人は、殆んど見當らない。

しかし午後になると豫報通り雲は深くなつた。そして夕方を待たず、雨はポツポツと降り出してきた。私はいさゝか得意でおのずと、頬の筋肉のゆるむのを感じた。歸り途、大ていの人々が傘を持たず雨に濡れてかけ廻つてゐる中を、私は傘を高くかざして悠々と歩いた。

だが私はすぐに自分のこういう心持を反省した。そして、これは飛んでもないことだと思つと、恥しくなつた。人はどうであらうと、自分だけよければそれでよい、という氣持は、随分氣をつけてはいても、ちよくちよくと顔を出すものである。

日常、こういう心持は誰しも経験することであらう、ほんとうの道徳とか宗教とかは、これを刈り取ることから始まるのである。(佐藤賢順)

童話 ひつこし……………高橋良和(8)

念佛の行者勇猛……………足立俊雄(12)

聖 貧……………藤井實應(11)

秋風は吹く……………吉田絃二郎(1)

浄土信仰の本質(一)……………眞野正順(4)

盜賊繪師……………吉田宣成(17)

渡邊海旭……………知切光藏(20)

颯田本眞尼……………藤吉慈海(15)

八月のメモ

芝園だより



秋風は吹く

吉田 絃二郎

北海道の知人たちから二通のたよりを受け取った。一通は釧路の友人からで、一通はついこのごろ夫君の任地へ二人のお子達を連れて旅立つたS夫人からであつた。

釧路の友人といふのは日本橋に生まれ、大學ではモリスやラスキン等を研究して、近代美學の造詣も深い學究肌の青年であつたが、トルストイの思想なども影響があつたのであらう、大正十二年の震災を機會に、北海道の森林に入つて、原始林を開拓して、薄荷畑を作り、燕麥を播き、牧場を經營した。そこは白鳥が訪れ、鶴が下りる原野である。かれはその太古さながらの靜かな環境にめぐまれ、文字通りに晴耕雨讀の生活をつゞけてゐる。

この友人からは、十五年來いつもわたくしの妻の忌日には遙々たよりを寄せてくれることが、習慣のやうになつてしまつた。

話は十五年前の七月一日の朝にもどる。かれは朝早く牧場に出かけて行つた。かれは自分の眼を疑はざるを得なかつた。その朝はじめて牧場の菩提樹の花が咲き匂う

てゐたのであつた。それは牧場を切り開いてから初めてのことであつた。かれは夫人や子達や弟たちを呼び集めて、恍惚として菩提樹下に佇んだ。實はその朝、わたくしの妻は東京で靜かに死んで行つたのであつた。その日の午後かれはわたくしの電報を受け取つたのであつた。かれはその朝はじめて咲きみだれた菩提樹の花と悲しい死を結びつけて考へないわけには行かなかつた。

そんな因縁からして、それ以來毎年七月一日のたよりには「今年は菩提樹は咲かなかつた」とか「菩提樹咲く」といつた文句が書きこまれてあつた。

けふのたようにも菩提樹のことが書かれてあつた。このしの七月一日は「満開ではありませんでしたが、今年はいつともより、早く咲き、もう盛りがすぎました」と書いてあつた。さらに牧場には野いばらが咲きはじめ、すゞらんはさかりを過ぎ「あやめ、かんさうが牧場をゆめのやうにし……青葉若葉の美しさ、小鳥の囀り、クローヴァのかをり、たゞもう酔ふやうに仕事に追はれて毎日

を暮して居ります」と、いかにもめぐまれた自然生活がうらやましく思はれるのであつた。

しかし最後に「何となく時代のきびしさが忍びよつてまゐりますやうな無氣味さの感じられます昨今でございます」と書き捨てられた文面にひたと惹きつけられた心地がした。

三十年前、平和と静閑の天地をもとめて北海道の處女林に入つた友人をして、これほどの歎聲を洩らさせるほど時代の相は冷たくきびしくなつた。

第二のたよりは北海道に渡つて行つたS夫人からのものである。夫君は北邊の防人として北の涯の任地にある。S夫人は二人の子達を伴れて、水雷の危険も唱へらるゝ津輕海峡を越えて北海道の最北端に近い町に出かけて行つたのである。若いS夫人としては老いたる病床の兩親を残してゆくことでもあるし、感慨無量であつたらう。

子供たちは「北海道に行つたら、ぼくは毎日鮭ばかり食べるよ。熊が毎日鮭を持つて來てくれるでせう」と繪本で見たおとぎばなしの樂園をゆめにゑがいてゐる。

若い夫人のたよりはそゞろに現實のきびしさが、それと掬み取られて氣の毒であつた。

しかし夫人の手紙を讀んでゆく間にふと、花のことを書いたところに會つて、救はれたやうな氣がした。

「少し靜かな、自分の時間を持てるやうになりましたので、花を生けましたが、花の開く工合までたのしまれます。花といふものは生活に疲れ切つた時の心をやはらげてくれるものとのみ考へてゐましたが、やはり靜かなあけくれに一番身近かなものだといふことを、しみじみ感じました。今白い一重の芍薬をさしてをります。ひなげしやかすみ草、ルピナス、飛燕草などがどこの庭にも美しうございます。町の娘たちがかはり／＼お花をとゞけてくれます」

わたくしは法然院の佛さまの前に供へてあつた二十五の花の群の尊さ美しさを想ひ出した。花は人間の心をなぐさめるとともに、二十五菩薩の御心をもおなぐさめ申すであらう。

今日は迎へ火を焚く日である。

朝のうちには今は亡き藤田寛雅さんの御母堂からおたよりをいたゞいたので、今日は迎へ火を焚くころもしほあはれ深く思はれる。おたよりによると、病床の小さいお子さんも床の上に坐れるだけになられたとのこと、この上はせめて一步でも歩けるやうにしてやりたいと、七十に近い母堂がたゞひとりの老いの手で、みとりしてをられるお姿を想像すると、運命のあまりにもきびしきに胸を打たれる。

おもかげや姨ひとり泣く月の友 (芭蕉)

迎へ火を焚く今宵、寛雅さんの母堂の孤影寂然たる姿を思ふと、ともに泛かぶのは芭蕉の句である。これは信濃の更科でうたつた句であるが、何となく子を先き立てた姨の今夜の悲しみに通ふ。

人生にはあまりにも死の悲しみが多い。あきらめてもあきらめて切れぬ。かつて加藤寛治提督が愛孫を亡くして悲歎に暮れた時、天龍寺の老管長は「ずゐびんお泣きなさるべく候」と書いて寄越した。

上田秋成は狷介不羈の人であつたが、その妻の死に際しては床上に反轉慟哭したといはれる。

悲しみに處してたゞ悲しむの他に救ひはない。

藤田さんの御母堂の手紙には忘れがたみ由佳子さんのたよりが同封されてあつた。そしてそこにも花のことがうたつてあるがこのたよりの花は一讀、わたくしたちの腸を斷つものである。

「先生その後おかわりございませんか。

お父ちゃんがなくなつたのでとてもさみしいです。……私の病氣もだんだんよくなります。このごろは机につかまつて立てるようになりました。ではお體をごたいせつにして下さい。

お庭のばらを見るたびに

父のすがたがなつかしや

お父ちゃん

もう一どこに

來てちようだい

藤田由佳一

わたくしたちはなくさむべき辭を知らない。

合掌

ラジオ放送 佛教の時間(八月)

一日(水)	アメリカの佛教(1)	鈴木大拙
三日(金)	名僧の佛	柳宗悦
六日(月)	一遍上人(1)	江部鴨村
八日(水)	お盆隨想	佛教學生連盟會員
十日(金)	ウラ盆會法要	渡邊照宏
十三日(月)	座禪の味い	
十五日(水)	新佛教講話	
十七日(金)	僧伽の精神(1)	
二十日(月)	佛教徒の聲	
二十二日(水)		
二十四日(金)		
二十七日(月)		
二十九日(水)		
三十一日(金)		

淨土信仰の本質 (一)

眞 野 正 順

先年「淨土教の本質」と題して平生考へております所を本誌に連載しはじめましたが中途事情あつて、身邊が急に多忙をきわめ、これを中絶したまゝ、遂に今日に到りました。執筆者の責任としても、また愛讀をして頂いた諸氏に對しても全く相済まぬ事と思つておりました。最近に至り漸く少閑を得ましたので、意を決して責任を果したいと思ひます。しかし、何分、依然たる病弱で、まだ机に向ふ事が許されませんので一口述一によりますから、さぞ、まだるいことと案ぜられますが、御諒承を乞ひます。

なにぶん、二年許りの歳月が過ぎておりますので、今迄述べました事の梗概を記すとしまして、ほとんど初めから説き直さねばならぬでせう。

新たに別な構想によつてやり始める事に致しました。

前の論は從來淨土教がやゝもすると佛教の傍流であるかの如く考へられていたのに抗し、歴史的に淨土教が開展してくる過程を畫いて、その本質を示さうとしたのでありますが、そのため、話の筋道が廻りくどく複雑になりすぎ、却つて淨土教の本質を見とどけにくくさせた傾きもありました。今回はもつとジカに淨土信仰の本質を取扱ふ行方をしたいと思ひます。それで題目も前と區別して「淨土信仰の本質」と致しておきます。いづれは同じ高嶺の月を求める麓の道であります。結末において前論と同じところに辿りつくことは勿論です。

第一講 佛教の本質

私共の確信によりますと淨土信仰は實に宗教としての佛教の中心本質がそのまゝ開展したものに外ありませんから

淨土信仰を述べるためには、まづ全佛教の本質は何であるかといふ問題から出發して參らねばなりません。御承知のやうに佛教は極めて幅のひろい廣汎な宗教でありますからその中にはいろ／＼と變つた主張や解釋が存するのであります。即ちあらゆる佛教徒がその前に來つて、必ず頭を垂れ無條件で歸依してゆく眞髓は嚴として確定しているのではありません。二千數百年の永い歴史を通じ、更に未來永遠に涉つて聊かも搖ぐことなく確定しておるのであります。それは何であるか。申すまでもなく、佛法僧の三寶であります。この三つのものは、全佛教の眞實不朽の基本をなすものであります。あらゆる時代社會を通じてかわる事なき永遠の眞實であり、世を超えた輝く至寶であります。佛教はこの三つの寶の永遠不磨なる實在を信じ、之にわが全身を投げ入れて歸依する事によつてはじめて成立するものであります。三寶は實に佛教にとつて、アルファであると共にオメガであります。三寶を信じこれに歸依することは佛教に入るの初めの門でありますと共に、三寶の理想を實現する事において外に佛教の遂げんとする目的理想はないのであります。

以上はおそらくあらゆる佛教徒にとつて、ほとんど常識でありまして、今更、事新しく申したてるまでもないかも知れません。然し、この點こそ後に述べんとする淨土教を

理解するに最も大切な出發點をなすものでありますから、特に注意を求めておきたいのです。

そこでもう少し念を入れて三寶の内容に入つて考へておきませう。

さてはじめは佛寶は申すまでもなく、佛教の理想を完全にその一身に具現した偉大なる人格でありまして佛教の心のなかの中心であります。宗教はすべてその信念理想の完全なる實現者が實存しなければ成立しません。いかに高遠な哲學をもち、また、心に迫る倫理をもつていましてもそれを眞實に實現した人格が實際に存在しなければ、其は單なる理想でありまして、まだ眞實と申すことはできません。佛教は紀元前五世紀インドに出現した釋尊に於て、その理想がまごう方なく實現せられた事によつて出發を初めておるのです。單に考へられた理論ではない。實現した眞理。——むしろ、その人を通じて、眞理それ自らが名のり出たる嚴肅なる事實。この「無比」にして「未曾有」なる事實が、全人類の信賴の根據を形づくるのであります。佛教はこゝにその出發を初めるのであります。

第二、法はかゝる理想の具現者、佛陀によつて示されたところの教であります。世間にはしば／＼常人を超えた異常なる靈能を具へた人物が現はれる事があります。そしてそれが特に精神的部面であつた場合、屢その許に多くの信奉者を集め、一つの宗教の形をもつてくる事があります。

殊に現代のやうに社會の過去の規準を喪つて人心が混亂した時代には、えてして、そう云ふことからいかにも新しい宗教が現はれて來たかのように騒ぐ人達がありますが、單に異常なる直觀や一種の性能を具へたからといつて宗教は成立しません。そののべる所の教を見ねばなりません。眞實の宗教ならばその教がこの宇宙人生を貫いて謬りなき眞理でなければならぬ。その教が狹隘であり普遍性を缺くならば、いかに異常なる性能をその人が具へたとて、それは迷信であります。多くの宗教は、その教主の神秘的靈能を誇ることによつて、その教法の眞理性を保證しようとしてゐます。然し眞實の宗教は、その教そのものが眞理でなければならぬ。教主の神秘的傳説を離れても、その教自體として崇嚴なる眞理の輝きを自ら示し得るものでなければならぬ。即ち、他の一切の眞理たとへば科學の如きものを含みつゝ之を超え得るものでなければならぬ。それだけの博さと深さを持つていなければ、究竟の眞理といふ事はできない。

佛陀の一法一は、決して單なる科學的法則ではありません。むしろ、それを含みかつ超えゆくところの高次なる合理性でありまして、更に高き見地より、科學的知識にその限界を示し、之を轉換して新しく綜合してゆく高次なるものであります。かくてこそ、それに倫理等をも含み、究竟なる人格の中に結合して、宗教の基礎となる事が出来るの

であります。

かくの如き基盤に立つものにして、はじめて永遠の宗教と云ふ事ができませう。佛陀の尊さは寧ろかゝる眞理をその身に實現したところに存するのであります。

されば、「法」は佛のよつて立つところの基盤であります。佛はその法によつてその眞實を現し、法はまた佛を得ることによつてその眞實に達するのであります。兩者は眞實宗教の缺くべからざる双輪をなすのであります。

然し、佛教の本質は、たゞに是のみに止りません。知らるゝ如く、第三に「僧」が數へられます。僧伽は佛法の社會的實現であります。今まで信念であり理論であつたところの佛教を實際生活の上に實現してゆく、といふ所に、特に重點が置かれまして、寶の一つとなつてゐる。こゝに實に深い意味があるのであります。さきの佛のところでも申しましたやうに、佛教の教法は、その「實現」を離れては、その意味をもたない。佛の尊きも、その教の深きも、いづれも、この現實の上に生きた現はれを見なければ、その意味をもたない。佛はその「理想的」實現であり、僧はその「現實的」實現であります。僧伽を構成するものは、まづ、比丘比丘尼、身を捧げて佛道に専心し得る者が、一の秩序ある社會生活をつくり、これを指導する精神において、これを構成する組織秩序を通じて、純粹に佛道を發現してゆく精神的團體であります。更に廣くそれを包むも

のとして社會一般の信徒男女をも含み、謂ゆる四衆として成立してゐる事に更に深い意味を藏しております。僧伽は純粹に佛道を實現せんとする精神的團體でありますとともに、それを中心とし、それを規範とし、その精神によつて率いられていく全社會を現はしたものでありまして、佛道が實際にこの生ける社會に實現してゆく姿を示したものであります。然も、この兩者の間には、何んら、その價值の差違はない。平等なる四衆として、比丘も優婆塞も佛陀の前には全く同等であり、女性は男性に對して對等なる人格とせられました。各自の佛性を内包するところの人格の尊嚴をあくまで肯認しつゝ、然も秩序ある組織を通じて、理想の實現をはかつてゆく、つまり、僧伽は理想的なる社會範型を示すものでありました。

一寸考へますと、僧寶は、これを構成する者が、我々自身に外ならないので、之に歸依するといふのに、自分で自分を禮拜するやうで、すこし妙に感ぜられるかも知れませんが、この事は、僧寶に限らず、三寶のすべてに通して云はれ得る事でありまして、三寶には二つの面が存するのであります。一方から云へば、佛も法も、すべてこゝにある現我々人間の眞の本質を爲すものとして我々から離れたものではありませんが、他方から云へば、その純粹な理想本質として——即ち、我々はそれに向ひゆく事によつて、はじめて我々の存在目的を遂げる事ができる。本質として、

高く我々を超え出たものであります。

従て、これに對して、心から歸依禮拜するは當然であります。この三寶それ〴〵が持つところの二つの面は淨土教を理解するに極めて大切な點でありますから、後に再び觸れる事に致します。

さて、この様に、佛と法と僧と、三つのものを以て、其教の中心本質とすることは、佛教の無比なる特色をなすものでありまして、他の如何なる宗教にも見る事はできない汲めどもつきぬ深い意味をこゝに湛えておるのであります。然も、この三者は互に相離しがたき密接なる關係に立つものでありまして、その一を缺いては他は成り立たぬと云ふ。鼎のごとき關係にあるものであります。三寶はその一つを缺いても、その佛は眞の佛でなく、法は眞の法ではありません。たゞ佛のみあつて、その法無ければ、それは迷信であります。法のみあつて、佛無ければ、それは單なる哲學道德に過ぎません。また、佛と法があつても、それを現實化する僧伽がなければ、それは宗教ではありません。この一つを缺いても、佛教は全く成立しないのであります。(つづく)

x

x

x

x

童話

みつこし



高橋良和

みつをちゃんのお家は、お父さんのおつとめの都合で
お家をかかわることになりました。

お父さんとお母さんは、朝からお荷物の荷造りでたい
へんでした。

ダンスにおすいじのお道具、それからお座敷のお机や
床の間のかざりものなどがすつかりまとめられて、玄關
の入口にならべられました。

「みつをちゃん、お前のおもちやも忘れないようにも

つてゆくのだよ。」

お父さんは荷物になわをかけながらみつをちゃんに云
いました。

「あのーみんな、おもちや箱にちゃんとしまつてある
の。」

「ええ、お父さんは心配しなくてもよろしゅうござい
ますよ、みつをたら昨日からちやんとこの箱に入れて
もち出せるようにしまつてあるんですよ。」

お母さんは、みつをちゃんのしまつたおもちや箱を指
さして笑いながら云ひました。

そのはずです。みつをちゃんのおもちや箱は大きいタ
ンスとお道具の間にはさまつてもう早くから玄關にもち
出されています。

「なるほど、なか／＼手まわしがいいぞ、あつはつは
つはつはつ……。」

お父さんは大きく笑いました。

「お父さん、あのトラツクいつくるの。」

「そうだね、十時と云う約束だから、もう十分もする
とくるだろうよ、それまでもう一度わすれものがない
か考えてごらん、お母さんもみつをも。」

「はい。」

みつをちゃんは、おへんじをすると玄關から奥へ、そ
れから自分のお勉強した部屋へやつてきました。

この家に住んでから三年と少しの間でしたけれど、幼稚園から學校へとこのお部屋で勉強したことを思い出すと、みつをはとてもなつかしい氣がしました。

よごれた壁には、ときどき落書したあとクレオンが昨日のようにはつきりと残つています。

お部屋はガランとして、もうなにもありませんが、机の前のところの壁に時間割がビツタリとはつてありました。

みつをちやんはそれをみると、今度お家がかわるについてやめた學校のことを考えてみました。鐵筋コンクリートの講堂、廣い運動場とそのまわりをとりまくボプラの並木のあつた今の學校、それからお友だちのこと、みつをはたまらなくなつかしいものでした。

それよりも、このお家を出たあとには入つてくるお家の子供はどんな子供かしら、

「僕と同じような男の子かしら、それとも女の子。」

そう思うとみつをちやんは目の前にはつてある學校の時間割も、

「そうだ、このまゝにしておこう、これを見て前のお家にも子供がいたと思うかもしれない。」

と、一人できめて、何度も何度もなつかしそうに時間割をみつめました。

とつぜん玄關から、

「みつをトラックがきたよ、早くおいで。」
と、呼ぶお父さんの大きな聲がきこえてまいりました。

「はい、今ゆきます。」
みつをちやんは、おへんじをすると、玄關にやつてきました。

門前には大きいトラックが一臺とまつています。

そしてトラックの運轉手と助手のおじさんは、さつそく大きい荷物からよいしよよいしよと、トラックにのせはじめました。

「ないようにみえてもあるものですね。」

「ほんとうだ、まあいろんなものが増えたね。」

「お母さんとお父さんはそう云いながらも、おじさんたちに手つだつて荷物をはこんでいました。」

荷物はだん／＼トラック一ぱいにつみこまれて、お家の中はもうすつかりスツカラカンになつてしまいました。

「さあ、いよ／＼これでおしまいだ。お母さんはトラックの助手台にお乗り、みつをとわしは荷物の方に乗るから。」

「みつを、じやお父さんと一緒にお乗りなさい。お母さんは女だからおじさんの方に乗りますよ、もうわすれものないの。」

「そうね、お部屋中すつかりみたけれど。」

「そんなら早くお乗りなさい。」

「はい。」

みつをちゃんはそう云つて、玄関から靴をはいて出ようと思いました。そして御門の敷居をまたごうとしたとたん。

「お父さん、一寸まつて、わすれものなの。」

なにか思い出したように聲をたてました。

「どうしたのだ、わすれものつてなんだい。」

「お父さん、あの一寸紙ぎれと鉛筆をちようだい。」

「紙ぎれと鉛筆つて。」

お父さんは、ポケットから手帳を出すとその一枚を破つて鉛筆と一緒に渡しました。

「ありがとう。」

みつをちゃんは、それをうけとるとどう思つたのか、

庭のすみのところへかけてゆきました。

そこには小さい石を三つほどつみ重ねた可愛い墓場があるのです。

みつをちゃんは、そのそばまでくると、紙ぎれを出してそれに字をかきました。

これは僕のかわい、きんぎよのはかです。今年の夏、よみせのきんぎよやさんで、きんぎよつりをしてもつてかえりましたが、とうとうしんでしまいました。

こんどこの家にくる子供さんもときどきこのおはかにまいつて下さい。きつときんぎよもよろこぶでしょう。

さようなら。

この家にまえにすんでいたこども

みつをより

と、手紙をかくと、それを金魚のお墓の前にそつと置いて散らないように石ころをおもしにおきました。

「お父さん、もうわすれものすんだよ。」

「なーんだい、なにをしてきたんだ。」

「うふん、一寸いいこと。」

みつをちゃんはそう云うと、一ばんあとからトラックにのりました。

「さあ、運轉手さんみんな乗りましたよ。」

お父さんが聲をかけますと、運轉手のおじさんは、

「出發しますよ。」

と云つてブーと一つ大きくクラクションをならすと走り出しました。

みつをちゃんは高いトラックの荷物の上から、金魚の墓がみえなくなるまでみていました。

*

*

*

*

聖 貧

藤 井 實 應

近頃ガンヂーの自叙傳がアメリカで出版されて、その口繪が多くの人々の心を惹いたという、それは

者から神の如く崇められた、遂に彼自身恐るべき病に感染して殞れた。

ガンヂーが生前所持していた全財産の寫眞であつた。スリツバ、サシダル、茶碗、匙、愛用の歌集、懷中時計、それに眼鏡などであつた。これが印度人二億、否全人類の崇敬を一身に蒐めた聖者の遺した財産の全部というには余りに貧弱であつたと、或る雑誌に載つていた。

×
ハワイ、モイカイ島に渡つて、救難傳道に生涯をさげたベルジウムの牧師教父ダミエンは「世間には知られずに居たい」というのが彼の切なる希望であつた。
救難事業に全分をさげ、同病

「今、全く貧しく死んでゆく、自分の物と名のつく物は何もない、あゝ幸なことだ」と感謝して息をひきとつた。一八八九年(明治二

二年)四月のことで、彼の病床には布も敷いてなかつた。彼の遺産としては、癩菌の一杯ついた一枚の古法衣があるきりであつた。

×
釋尊は八十才で、クシナガラ城外のサーラ樹林に於て入滅せられたが、弟子に遺された物としては一着の袈裟のみであつた。
キリストイエスが十字架にかけられた時、彼の唯一の財である一着の上着を、衛兵たちが奪いあつ

たと傳えている。

×
法然上人は四十三才まで師の叡空上人のところで居候の生活をしておられた。晩年流罪となり、許されて京へ歸つた時、慈鎮和尚の世話で大谷禪房の小庵を借りての詫び住まいであつて、十一月に歸つて翌建暦二年正月から病氣になつて二十五日に八十才で入滅せられた。

×
親鸞上人は晩年京都へ歸つてから、あちこちと轉宅しながら貧しい中に九十年の生涯を閉ぢた。末娘の彌女が女中になつたり、あちこち雇はれるのに苦心したことなども傳えられている。

×
われわれの及びもつかぬ聖者であるとはいへ、これら古聖の清貧を思うにつけ、余りにも物に執着し、物慾にとらわれている自身を慚愧せずにはおられない。そしてわが魂の奥底について激勵して下さる光を感じるのである。

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替(東京八二一八七番)を御利用下さい。

念佛の行者勇猛

足立俊雄

福島市の郊外笹谷に、名越専稱寺末の蓮光寺という寺がある。元攝取庵といい、今から

約二百年程前に良弘勇猛によつて中興されたさゝやかな寺である。この勇猛こそは先頃、

「昔の人今の人」の題でラジオの放送があつたが、今までは餘り紹介されたことのない所

謂世に知られざる聖者であります。これを偶然現住須田泰山師から詳しく聞き、實地に遺

跡を訪ねてみようと思ひ立つて、バスを乗り繼いで田舎道を蓮光寺に赴いた。着いたのは

夕暮近くであつたが直ぐさま觀音堂と呼ばれている土蔵に入つてまず勇猛の備えた一切藏

經を拜見した。紛れもない黄槩版でキチンと箱に入つており、昔かゝる避村に一切經を揃

えたという願心に胸を打たれる思ひであつた。目錄もないまゝ一應揃えるという程度の

整理を、蠟燭の光を頼りに、夜を徹して行つてみた。

各卷末特に經部に

奥州信夫郡下大笹生村施主

佐藤吉五郎

爲先祖代々菩提也、伏願依此勝因各々隨心

滿願菩提福壽高増

安永五申年三月

奥州信夫下大笹生村新町

願主 沙門勇猛敬白

の木版が押してあるので、勇猛が願主となつて信達二郡有縁の徒を勸募して此の藏經を備

えたことがわかる。

何か傳説でない確な資料でもと思つて探したら境内に念佛供養碑や一切經塔誌などが建

つてゐる。是等の寫しを得て調査したところ

(八月のメモ)

一日 今月は各地大社の祭禮が多く、一日の大宮の氷川社、長野の諏訪下社の祭禮に始まる。又、かつては芝増上寺の寶物虫干しが行われた。

六日 めぐり來る六星霜、この日廣島を見舞つた原爆よ、更び地球上に炸烈することなかれ。平和祭が盛大に行われる。

九日 六道參。京都では、此日弘法大師が開基であると傳えられる松原道六道

珍星寺に、先祖の靈を供養するために參詣する。沿道に賣る早稻を供え、又槇の

枝を手折つて手向けた。又舊曆七月七日の今日、青森地方ではねぶた祭が行われ

た。色々の飾り物を作つてねり歩き、これを河や海に流して、ネブタ即ち睡りの

魔を追い拂う慣わしで、都會地では今日盛大な祭事となつてゐた。

十三—二十四日 六齋念佛。京都空也堂、壬生寺等で行われた念佛踊り。近

來壬生では二十三、四兩日行う。空也上人が昔、衆生を濟度せんとして太鼓及び鼓

を鳴らして踊り念佛を行つたのに始ま

によると、蓮光寺は延享(一七四四—一七四七)の頃、勇猛が其の邊の信者と一諸になつて土木の功を積んで建てたのだ。安永四年(一七七五)に無能寺の光嚴無任の撰した「一切經塔誌」によれば當時の地方寺院としては相當完備したものだつたに相違ない。

かくて勇猛は此寺を中心に地方の教化に力を注いでいたのであるが、明和七年(一七七〇)の頃、病に患つて約一年というものは病床に親しむ身となつた。しかし報命も盡きなかつたと見えてやがて本に復したのであるがこの病の體驗から、「諸法本幻化而因緣所成壞亦有時何有定性」の理が身に沁みて考えられむかし雪山童子が半偈を聞かんとして身を捨てたことや、常啼菩薩が般若の教のために身を割いたことなど思い合せて、自ら外命の資財を喜捨して報恩藏を奉請し、未拜の輩にはさとりの良い因縁となり、又、智慧すぐれた人は、この一切經を讀んで、法を味わうてそれとゞ佛法の榮えんことを願つて、二時の粥、寒暑の衣も節約してその用に充てて、人にも呼びかけ悲願を達成しようとした。なか／＼の難事業なので、勇猛も具に辛苦を嘗め

たが事の成就是容易に豫想できなかった。ところがかねてから勇猛の教化によつて信仰の篤い佐藤英政が勇猛の發願に心からの協力をよせ遍く有縁の僧俗を誘つて淨財を募り、五年の星霜を閲して、漸く安永四年(一七七五)十一月に其の完成をみ、慶讃供養を修するこゝとができた。勇猛といい、英政といい、まことに獲難い護法の人である。この外護者の佐藤英政については、寶曆七年(一七五六)年の八月に、彼が勇猛を導師として四十八日の不斷念佛を満じた時建てた供養碑がある。ともかく、爾來百七十六年もの間、荒れるにまかせており、目下目錄作成中で確とはいえないが、假令その若干が缺けていても、六千八百七十餘卷の黃檗版がそつくりしていることは一つの奇蹟ともいふべきことである。鐵眼禪師不屈の精神が遂に黃檗版を完成した偉業にも似て、勇猛の倦むことを知らない志願の満足に、佛天も深い加祐を垂れたものであるうか。

尙進享二丑年(一七五五)七月十二日、涼青道林信士菩提の爲に寄進された高さ一尺黒塗に彩色で三面に釋迦並に兩脇士、三面に

る。六齋とは月の中の六日即ち八日、十四、十五、二十三、二十九、晦日にこれを行つたのが、特に八月は舊七月の盆月としてこの月に行うようになつたのであらう。

十五日 終戰記念日。八幡宮放生會。

元來放生は佛者のつとめであり、釋尊自ら放生の德を讀え、生類を河泉池水に放たしめた。中國の天臺智者大師に至り、天臺山に放生池を定め、生類に三歸戒を援けてこれに放ち法を説き、放生會を設けた。天臺の慈雲四明始めてその儀規を制定した。吾國では敏達天皇七年(西曆五七八年)六齋日に殺生を禁じ、天武天皇五年(西曆六七七年)詔して放生を修す。次いで元正天皇養老四年(西曆七二〇年)日向と大隅の二國に亂起るも、宇佐八幡に祈願してこれを平げ、その神話により死者冥福のために諸國に放生を修せしめ、宇佐に於いては勅會を行う。その後男山に八幡を遷するに及んで毎年八月十五日これを行うこととし、後三條天皇延久二年(西曆一〇七〇年)法會と定められる。現今各寺では放生會は多く秋

聖德太子並に兩侍士を描いた八角の一切經輪藏の外側だけが残つてゐる。年代からいつてもこの藏經とは關係がないようで、恐らくこれは「一切經塔誌」にいう「上宮を高閣に請じ、大經を寶藏に納め」たとあるその大經の目錄であらうか。

この一切經の外に寶曆十一辛巳年（一七六〇）結夏安居申謹寫とある勇猛の御名號が一幅あるが、願文を併せた七十字に金字で三部經を書寫してある。誠に勇猛の名に相應しい上人であつたことが偲ばれて、低頭合掌せずにはいられない。

又勇猛は信達二郡の土を絹篩にかけて自ら土偶の佛像を作り、現本堂から西南に當る山林の中に安置して此地方の平安を祈つたという。古老の話によれば佛の鼻の大きさは三度笠を被つたまゝ入れたという程である。その上を覆つていた御堂も佛像も長い間荒れるがまゝにまかせおいたので、風雨のためにとう／＼崩れてしまつて、現在は其遺跡と覺しいところが僅に残つてゐるだけであり、唐金で作られたその模型が、安達原の鬼塚の遺物と一緒に賣りものになつたと噂されてゐた。

現に一切經が納められてある土藏は觀音堂といわれているが、實際は阿彌陀堂で、本尊の外に約六寸の四十八體の彌陀立像が、一々に施主の名を書きこんでその半分位が今でも安置されてあり、その床下には一石一字の一切經も藏されている。この中の一部分であらうが、今の吾妻山の一切經へ自ら背負つて登山して供養したところから、此處を一切經と呼ぶのだといわれる。其際、側に立ておいた錫杖に落雷した爲、勇猛は其場で即死したとも、人事不省のまゝ村人に寺へ運ばれて亡くなつたともいわれている。傳説としても面白く、ひたむきな念佛行者の生涯を閉じる一コマとしてもドラマチックな話ではないか。

こんな邊鄙な片田舎にも念佛の行者は曾てはあつた。そして人にも知られずに往生を遂げている。而も尊い多くの文化財を遺して、こうした先輩の美しい事跡を全國的に調べたら、まだ／＼幾多の尊い求道者が世に知られることだろうと思う。名利を求めず、榮華を事とせず、所在々に念佛を行じたかくれたる聖者こそ、法然の教を傳へるに力強く、しかもふさわしい方々であらう。

（八月のメモ）

特に淨土宗では十夜會と一緒にして行つてゐる。

このような機會に、しみじみと殺生のことを反省し、すべてのものの生命の尊さを感じて行きたい。

十六日、京都如意岳の大文字火祭 元來は盆の精霊の送火で諸山に行われたのが、今日では京都にのみ残り、而も大規模な名物の一つとなつた。

二十三日、一遍忌。時宗開祖圓照大師一遍は四條天皇延應元年（一二三九年）伊豫國に生れ早くより天臺を學び、次いで淨土宗に歸門した。文永十一年（一二七四年）夏、熊野權現に參じ、「六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華」という靈示を得てついに念佛三昧を發得した。これその宗義の根本義を一遍と名づける所以である。爾來諸方を遊化すること十有六年大いに道俗を教化し、正應二年（一二八九）八月、世壽五十一才にして往生す藤澤の清淨光寺はその本山であり、遊行寺の名で有名である。

（八月のメモ）

布施行者

颯田本眞尼

藤吉慈海

それから淨土宗の篤信者前谷藥店へ泊られ、夜は近所の信者方も集まり前谷夫婦を中心に御説教して下さいましたが、島でのお話と異り程度の高い法語だと思ひました。翌朝御讀經の後ご飯が出ましたが、はじめの一杯は頂かれ次の二杯目は、昨日名護屋郵便局長の家で頂かれた餘りの御飯を出して頂かれ、前谷夫人がそれはこちらへ下さい決して粗末には致しませんと申されるが、どうしてもおきき下さいませんでした。この追憶記を書かれた彌富先生が、大正九年八月、態々相州鶴沼に老尼を訪ねられた時、老尼は折よく慈教庵に居合せたことを大變喜ばれて、先生はじめ島の人々へも澤山のお土産を下さいました。八月一日老尼に見送られて先生は江の島の辨天様へ詣り、龍口寺へ行かれるとき、茶店に寄りますと御尊尼は、隅の方へお腰をかけられ、茶店の婆さんが、どうぞこちらへと言ふと、こんな穢い尼がそんな所へかけると、お客がよらないからと實に勿體ない御謙遜なお言葉であつた。お晝をなされといつて御尊尼は肩の荷物を下して下さつた。私がお辨當を頂きますと、それを包んであつた新聞紙の皺をのぼして疊んで紐と共になほしてお持ち歸りになりました。見るともなく私はそれを拜見しました時、尊くも

あり勿體なくもあり、何も申されませんでした。龍口寺の下で、お饅頭を買つて下さいました。お土産の荷物を頂いて私が電車に乗ると、車掌に權五郎で下してくれと頼まれ、發車しますと共に合掌して別れましたが、私は胸せまり涙一杯で何とも言ふことが出来ませんでした。お辨當は其土と翌日のお晝まで頂きました。それはおすしにして焼いてありました。お辨當につけたお箸や頂戴したお土産は大切に保存して、兒童の資料として居ります。

其後、島人達も又お越し下さいと申し兼ね、御寫眞なりとももらつてくれと申しますので、左様に何度も申しましたら、大正十年に一葉の御寫眞を頂きました。早速引延して觀音堂へ掲げ、生佛様として島人は朝夕拜んで居ります。

昨年御遷化なさいました節は、島民一同觀音堂へ集り御寫眞を拜し、哀悼の誠心を表し、御葬式の夜は御通夜をなし、又九州より御僧様を迎えて御施餓鬼を致しました。今や御尊尼様の御靈は玄海の一孤島馬渡島のある限り、永久に島の守護神として島人を善風感化して下さいることを感謝いたします。

と非常な感激にみちて、この感想記は終つてゐる。そしてこの長い

見聞記が老尼の信仰と行實とを知つてゐる人々には、全く老尼の平素其儘を語るものであることを認めるであらうと矢吹博士も述べてゐられる。

老尼の三十四年に亘る施し行脚のうちには、尙傳へらるべき色々の逸話を有するが、今はたゞ相州鶴沼に慈教庵を建立せられたことについて述べよう。

老尼五十九才の時、布教擴張並に日清戦争戦死病没者のため、建立せられたものである。三陸の嘯海の後には雲照律師はじめ正法會員の方々や在京知名の士にも知合ができていた。そのうち老尼の徳風を敬慕する人々が、老尼に關東へ來て念佛の結縁をしてくれと懇願した。老尼は辭退せられたが、熱心な老尼の信者達はどうしても老尼を關東へ迎へたがり、その中の一人細川いと子様が、鶴沼の別荘の一隅五百坪を供養するから、お寺を建ててくれと願はれた。老尼は再度固辭されたが、細川様が態々東京から三河まで依頼に來られたので、共に鶴沼へ行かれた。そのあたりの光景が十年程前夢にみられた光景とよく似てゐたので、有縁の地なりと感じて一寺建立の決意をかためられたのである。そしてその寺の御本尊はお顔を三河の丹羽さんといふ方に、お體を京都の小泉といふ佛壇屋に依頼して彫まさせられた。丹羽氏は一刀三禮の誠をもつてお彫み申上げた。このみ佛様はその後老尼をはじめ、そのお弟子様方や信者の方々によつて心から尊く拜まれ給ふた。ところが、大正十二年九月一日の關東大震災に遇ひ、その本堂は丸潰れになつてしまつた。老尼はその時丁度廊下を通つてゐられたが、あの最初の衝激に庭先へはねとばされてしまつた。然し不思議に傷一つ負はず、七十九才の老尼は、すぐさま本堂へゆかれ潰れた屋根をはいでみられると、御本尊様は

天井板を破つて何の變りもなく安祥として起立してゐられるのであつた。老尼は感激のあまり、合掌禮拜して早速再建にとりかかられた。翌年少し場所を移轉して現在の本眞寺の位置に假本堂を建てた。その頃から軽い中風症にかゝり、それから遠方への施行脚にはお弟子の智山尼を代理として遣はされた。

死期を知つて、後事を定め、醫藥を辭し、方々の知人を訪ふては別れの言葉を述べられた。同十三年、知思院で開宗七百五十年の大法要が修行されるに及んで、弟子に護られながら、病軀を推して登嶺、各本山を巡拜し、京阪一帯の信徒を訪問して永訣を告げたのであつた。

爾來、慈教庵で、弟子に看とられつゝ念佛を唱へては日を送り、遠國から信者がやつてくると、喜んで面談し、念佛の行を勵むよう勸めておられた。昭和二年境内に關東震災記念のため、安置された金銅地藏尊の開眼法要を終つて、三河徳雲寺に歸られた。地方の信者法類の訪問は、ひきもきらずという有様であつた。何等の病苦もなかつたが、昭和三年七月下旬よりやゝ食を減じ、八月に入つては果汁のみとなり、自ら命終の近きを知るものの如く、弟子の助音の下に靜かに念佛しておられた。八月八日夕、やゝ苦痛を覺えられたようなので、弟子たちは臨終の行儀を整へた。六字分明に高唱念佛百餘遍、二度ばかり、微笑して枕頭の來迎佛を、指さされ念佛の聲諸共、正念往生を遂げられた。行年八十四才であつた。

尼は生前中、近來葬儀が虚飾を事として華美に流れ、清楚の風が衰へるのを悲しんで、慈雲尊者の葬儀の式を慕ふておられたので、世俗に流れず清規に準じて、しめやかに葬儀が行はれた。

式場は故徳を慕ふ人々に溢ふれ、暑中を厭はず境内に満ち／＼て今は亡き老尼に永別の誠を捧げたのである。遺弟に昇がれた棺が、火葬場に到るや、途中沿道の兩側には町民威儀を正して之を送り、恰も父母の喪に會ひたるが如く、合掌念佛したといふ。如何に、老尼の徳風教化の深かつたかが窺はれます。(完)

盜賊繪師

吉田宣成

そこに世

去る年の夏、旅先きの宿亭で或る藥草賣りの老翁からこんな物語をきいた。

◇

年を経た蝦蟇や青大將の棲みついてゐる丈餘の叢を押し分けて、山澤を降ること小一里にして漸やく部落の入口にたどりつく。念佛寺はそれほど奥深い山峽に埋もれてゐた。眞夏の日盛りでも、杉や檜の老樹は草深い境内を暗く陰らせ、わずかに朽ちかけた鐘樓の屋根、苔むし傾きかけた墓石に、明るい日ざしが樹間を洩れて揺れてゐた。住職は半世紀にわたる年月を獨りこの山寺に送つて來たとゆふ松の瘤のやうな老僧であつた。葬式法事があれば、やむを得ず山を降りるが、其他の用事では滅多に里へまかり出た驗しはなく、い

わゆる山中曆日なし仙人のやうな日常を愉しんでゐた。がしかし元來特に繪を好み、佛畫や淡彩な墨繪ばかりでなく、錦繪の類に至るまで幾點か所藏し、折にふれ賞玩することゝ唯一無上の慰めとしてゐた。

さて眞夏の或る宵のこと、老僧自ら裏手の厨で素末な夕餉の仕度をしてゐると、表で案内を乞ふ聲を耳にした。白雪のやうな眉を上げると、おぼつかぬ足取りで老僧はその方へ廻つて行つた。見ると蓬髪日焼けた中年の大男が無表情で突立つてゐた。鼠色木綿の洗ざらしの單衣を着、よれよれの袴をはき、素足に冷飯草履を突っかけてゐた。持物と云へば腕にかゝえた茶の風呂敷包みだけで、たえず上目づかいに老僧の様子をうかがつてゐ

た。何者か一寸と見當もつき兼ねて、老僧はまず用件の趣きを尋ねてみた。すると男は「旅の繪師だ。山道に迷つて此所まで來たが部落の方向が解からぬ。一泊させてはくれぬか。」

まことにぶつきら棒な返答だつた。粗悍な言動だが、併し繪師とは凡そこんなものかと別に深い疑ひもかけず、また一夜を好きな繪談議で過すのも格別と思ひ、老僧は氣輕るに承知してやつた。

老僧は自分の夕餉を分け與えて、暗い燈下に差向ひて箸をとつたが、繪師と名乗る男は相變らずの無表情をつゞけ、餘り食事も進まぬ風で、唯眼だけが何となく落着きを失つてはゐた。食後濡縁に近く坐りこんで、溪をわたり樹幹をぬつてくる杜父魚の鳴く聲を耳にしたが、老僧はぼつ／＼繪の話を持ち出したが、男はろくな受け答へもせず漠然と暗の中を見透してゐるばかりだつた。(繪師にして繪の話をつらわしがるとは、この男餘程の變り者だ。)老僧は一夕の折角の愉しみも期待はずれに終つた形で、冷えたお茶を默然と呑みほした。

ほど經て繪師はのつそりと立ち上り、

「老僧、俺に構わず眠つてくれ。明日は早く此處を發つから。」

燈火に映し出された繪師の影は、高い天井一杯に立ちほだかり、揺らめき動いてゐた。繪師はそのまゝ外の門へを用足しに下りて行つた。とり残された老僧は、やれ／＼とゆう表情で腰を上げ、老猫のやうな伸びをして、廻り縁をきしらせながら奥の寢間へ引きあげて行つた。人氣の去つた室には燈火にまつわる羽蟲が軽い唸りを立て、夏の夜は刻々に更けて行つた。

何時間経つたやら、老僧は胸のあたりに恐しい壓迫を感じた。苦しい呻きと共に寢返りを打とうとして目覺めた。たるんだ臉を開いて目の前を見廻すと、暗い灯影に映つたのは、自分に馬乗りになつてゐる例の繪師だつた。蓬髪を亂し形相物凄く老僧をにらみつけ、兩手で首を締めつけようとしてゐるではないか。無意識のうちに老僧のかぼそい手が、繪師のその手に必死の抵抗を試みてゐた。

「おい坊主！ おとなしく念佛でもしないか。俺は尼殺しの兇狀持ちだ。もうすぐ極樂詣りをさせてくれる。」

繪師の手はいよいよ力を加えて来る。老僧

の足は布團をはねのけ甲斐なく暗を蹴つてゐたが、心はむしろ靜かに事實をみつめてゐた。(わしは今殺されかゝつてゐる。これが八十年の生涯の最終の苦しみか、……しかしこの男、わしを殺してどうする氣なんだらう。何が得られると云ふのだ。)燈火の高度がむきになつて老僧のやせ腕をもぎ取らうとしてゐる繪師の顔に深い隈を彫りあげ、それが宙に浮んで見える。老僧は夜叉惡鬼の面相だと思ひ、地獄に墮ちたこの繪師に深い隣れみを覺えた。

「これ／＼そんなに強く締めつけるな、苦しくて息もつけぬ。大體わしを殺したとて何の益があるのだ。山寺の老僧金にはとんと縁がうすい。ともかくその邊にお前の好きな物があつたら遠慮なく持つて行くが宜からう。」

老僧はそう苦しげに云ふと、力を全く抜いて徒らな腕きを諦らめて觀念した。すると繪師、いや盜賊の方でもどう氣が變つたのか、

放り出すやうにして老僧

式場 今は一室の隅に轉

がすと、深い吐息と共に掌で氣の汗をぬぐひ

「後生のよい奴だ。少しの間そこで涼んでゐろ。仕事がすんだら有無を云さず締め殺

して呉れる。」

凄文句を吐きすてると、慌しく手文庫や用筆筒をかき廻しにかゝつた。老僧は室の隅に蛙のやうに這ひつくばつて、賊の舉動をみながら亂れた息をとゝのえてゐた。かぼそい羽音をたてゝ耳をかすめてゆく藪蚊を拂ひながら裏手に落ちる寛のやわらかな水音に聴き入つてゐるうちに、老僧はやけるやうな喉の喝きを覺えた。悠々と金目のものを物色してゐた賊に向つて、

「なあ、すまんがその經机の上にある金米糖の壺をとつてくれぬか。喉が渇くでな。」

とたのんでみた。賊はぎよつとしてそちらを向いたが、黙つて壺をとると老僧の方へ投げて寄こした。壺は乾いた音を立てゝ古壺の上を轉つた。大粒の金米糖を一つづつ摘み出すと、老僧は子供のやうにしやぶり始めた。

「全く貧乏寺だな。つぶしの効かねえ代物ばかりだ。」

賊はぶつ／＼獨言を云ひながら、燈火を引寄せると更に漆塗りの衣簞筒の扉を開きにかゝつたが、老僧はそこに納つてある繪の軸物や額は、永年愛蔵して來たものだけに、流石

に惜しい氣持がしてたまらなかつた。併し賊はそんな老僧の心持にはおかまひなく、抽出しをこぢあけると先ず五六幅の軸を取出し、ようやく満足げにそこにどつかりと胡坐をかくと、丹念に油紙に覆はれた小型の額の包みを解き始めた。ところがそれは老僧秘藏の浮世繪で、元祿風を装つた五人の佳人が、あでやかな風情で庭前の菊を飽かず愛てゐる、いわゆる「菊見」の風俗を描いたものだつた。

老僧にとつては、命より大切な品物だ。金米糖を舌の上にのせたまゝ、思わず息を秘そめて茫然と賊の様子を見守つた。賊は上包みをすつかり取りのけると、おもむろに額を燈火の方へ近寄せて行つたが、突然初めてニタリと卑しい笑ひを頬に浮かべ、

「坊主、貴様老ひぼれのくせに結構生ぐさだな、見ろ襟をぐつと落し胸元を覗かせた女共の繪ぢやあねえか。霞を喰つてやがるやうな面をしてゐても、大方この繪を取り出して、夜な／＼獨り御氣嫌になつてゐるんだらう。」

さう毒づきながら賊はその繪を老僧の方へ突き出してみせた。併しその時にわかに老僧の態度が改まつた。白い眉の奥に淀んでゐた

眼がキラリと光り、ぐつと額を突き出すと、

「愚か者——人を殺したとは云ひながら、貴様も繪師の端くれなら、貴賤尊卑の差別が解らぬ筈はなからう。そこに描かれた菊見の美女の容貌をとくと味ふがよい。俗惡卑猥の犯しがたい貴品にみなぎる顔色は、實に光顔巍巍たる佛相にもたとふべきだ。或ひは貴様の如き盜賊繪師の窮知するところではあるまいが。」

わずかな暗黙の時が流れ去つた。がしかしこの突き刺すやうな、しかも諭すやうな老僧の言葉と、その炯々たる眼光は次第に賊の卑俗な皮肉笑ひを拭き消して行つた。賊は素直に再びその額を一層燈火の直近かで凝視してゐたが、やがてその畫面に吸ひ寄せられられて行く様子だつた。

樹蔭をぬたつて來る梟の鳴聲が、一きわ澄み切つた深更の闇をたゞく。老僧は壺を傾けて幾つ目かの金米糖を掌に轉がす。靜寂の中で賊はぢつと畫面の女の顔を追つて行くうち菊見の女の顔に重なつて、更に清淨な女の容貌が浮び上つて來た。賊は慌てゝそれを瞬きして拂ひのけようとしたが、その聖容は益々はつきりした輪郭を現わして來るばかりだ。

幾たびかさうゆふことを繰りかへしてゐるうちに、賊は數日前に己の手にかけて殺した尼僧の淨らかなほどに寂然たる死容がよみがえつて來た。同時に賊は慄然として手にした額をとり落して終つてゐた。その突然の偏りで燈火が大きく揺れなびき、賊のうな垂れた影を左右に傾いた。

併しやがてその影は、怖氣ついた動作で一步二歩と後ずさりし、後手に明障子を開ける上、賊の蒼ざめた顔が老僧の方に向けられ、

「老師、お世話になつた。」
ぼつり一言云ひのこすと、風のやうに闇にその影は吞まれて行つた。



老翁はこゝではのかに笑ひ、「何でもそれから間もなく、その繪師は村の駐在所へ自首して出たと云ふことですよ」とつけ加えて話を結んだ。



光を掲げた人々

旭 海 邊 渡

(一)

作・歳 光 切 知

(NHK放送臺本)

M(音楽) ブリッジ(はしわたしの曲)

雪山恒河ダージリン夢寢に忘れぬ五天竺印度の志士に一掬の熱き涙をそゝぎけん。

アタール逝けど……

語り手 已を律すること、極めてきびしい代りに、他人には春のような温か味を以て接した海旭にも、一面、江戸ッ子肌の

火の玉のような面がありました。

東京外國語學校の印度語の教師アタールは、印度からの亡命客でありましたが、イギリス對インドの複雑な關係の板ばさみになつて、自殺してしまひました。その通夜の席上のこと。

「S・E(擬音効果) オフ(間をおいて) 誦經の聲」

客の一 これだけ集まつてゐて、葬式の費用を捻出することができないとは、意久地のない話ぢアないか。

客の二 貧乏のせゐばかりぢアない、外務省の意向を憚つてゐるんだ。

客の一 しかし、死人に罪はないだろう？

客の二 シッ…… 渡邊海旭さんが何か言い出した。

海旭 皆さん、アタール君の葬儀費用は私が全部負擔しますからどうぞ出来るだけ盛大に送つて下さい。

友人 (低聲で) 君、渡邊君、アタール君は君、デリケートな國際關係をバックにしているんだぜ。

海旭 いゝです。責任は私が負います、また葬儀は明日、私が導師となつて私の寺で行いますから、なるべく多數の參列を佛のためにお願ひします。

「S・E ある感激のざわめき」

客の一 さすがだね。

客の二 やつぱり海旭さんだ……

M ブリッジ

語り手 海旭のアタールに對する、心づくしは、それで終りではあ

見りませんでした。

友人 渡邊君、君はアタール君の遺骨を印度のアタール君の遺族の家まで、届けさせるというのは本當の話かね？

海 旭 本當だ！ ちようど青柳貴孝君が、洋行するついでに、佛蹟を廻つて行きたいと言うのでね。

友人 しかし君、アタールの一身に關しては、余り深く立ち入らない方が、いゝんぢアないかね。すでに葬儀の時にも、君一人が取りしきつたというので、何彼と目を光らせている向もあるそうだからね。

海 旭 覺悟してるよ。

友人 何しろ國際關係が絡んでるからね。

海 旭 しかし、君アタール君の遺骨を、このまゝ日本において、アタール君は成佛できるだろうか。

友人 さア、アタール君には氣の毒だけどね……。

海 旭 アタール君に、よし罪があるにしても、死んでしまつたら佛ぢアないか、恐らくアタール君も、海山萬里を距てた日本で客死することはよほど心残りだつたことゝ思うと、可哀想ぢアないか。

友人 それは解つている。

海 旭 ぢアいゝぢアないか。坊主は佛法に生命を托してるんだ。佛の世話をして、その爲に、何か浮世の禍を招くようなことがあつたとしても、それは坊主としては本望だろうぢアないか。

友人 渡邊君——君はそこまで考えて……。

海 旭 御開山法然上人が、八十になつて流され給うた時にも、お

かげで近鄙の土民達に佛の教へを知らせることができると言つて、喜びなかつたためしさえあるぢアないか……。

友人 そこまで腹をすえて、やることなら、僕はもう何も言うことはないよ。青柳君に印度へ届けさせたまえ……。遺族の人達がどんなによろこぶだろう。

海 旭 遺族の人もだが、アタール君の魂がね……。

友人 渡邊君、君は——。

海 旭 僕は唯、佛に仕えるものとしての務めを果たすだけだものね……。

M
ブリッジ

語り手 海旭の深い學識と識見とは、これまでの僧侶のような、狭

い殻の中に、閉こめてはおかず、新佛教を唱えて、佛教の社會的進出、世界的展開の、のろしを上げ、幾多の社會事業の先驅者となり、殊に教育方面にはその力を注いで、幾多の大學、中學校の校長に推されましたが、殊に芝中學校の校長としては前後二十二年間つとめ、多くの子弟を育成し、或は自分の俸給を投げ出してまで、數多の秀才を養育しましたことゝ高楠順次郎博士と協力して、大正新修大藏經を刊行した、功績は長く忘れることが出来ません。

M
ブリッジ (ある急迫した悲痛まで)

語り手 (早口) 昭和八年正月元旦——

暮の二十七日から、流行性感冒にかゝつて病の床に伏していた海旭は、四時半の聲をきくと同時に、ムックと起き上

り、潔済の上、袈裟、衣の法服姿となつて、佛前に詣で經を誦すること二時間、火の氣のない本堂の寒氣は肌を徹して、骨も凍るばかり、例年のつとめとは言え、病中の身は悪感を催すなかにも嚴然とつとめ終り、更にフロツクに着代えて、芝中學校、新正の式に列しようとするのでした。

深川御船藏町の西光寺から、芝中學校まで……

弟子 先生、いくら何んでもそのお身體では無理です、どうか、どうかお休みになつて下さい。

深 旭 いや、校長が、新正の式に缺席しては、式はしないのと同じことだ、中學校では一千名の生徒が待つてゐるんだからね。

僕は二十二年間、一度も新正の式に休んだことはない。

だから止めないでくれたまえ。

弟子 でもお身體に……。

海 旭 なに大丈夫だよ、禮裝したら、却て身體がしやんとしてきた、すんだらすぐ歸つてくるからね。

M ブリツジ。

語り手 無理を承知で、出かけた芝中學校の新正の式——。

(S・E 生徒總代の 脱帽 禮——)

かすかに新年の歌の合唱

語り手 講堂正面の壇の上に、突ッ立つたまゝ、おごそかに新正の式を完うした。渡邊校長の姿——。しかも式終るや、そのまゝ壇上に倒れ伏して……、芝中學校に於ける、渡邊校長

の姿は、それを最後として、遂に見ることができなかつたのです。

M ブリツジ。

弟子一 (しめやかに) やつぱり無理だつたんだ。でも式の終るまでよくあの壇上に立つていられたものだね。

弟子二 余程我慢をしておられたんだね。あんなに止めたのに……

弟子一 あの熱で、一足でも、外へお出ししたのが悪かつた。僕達が悪いんだ。

弟子二 こうと知つたら、どんなに叱られても、あの時お止めするんだつた。

弟子一 だけど、僕は二十二年間、どんな時にも新正の式に休んだことはない——と言つて屹となられた時には、とても僕達の力で、止められるものではないと思つたよ……。

弟子二 先生のあゝ言う信念は、一種の行なんだものね……。あッ先生が呼んでいらつしやるようだ。

弟子一 先生のお妹さんは、

弟子二 赤尾の奥さんは、今、お藥を煎じていらつしやる。

弟子一 よし、僕たちが行こう……。

M ブリツジ(ごく短かく)

弟子二 先生お呼びでしたか?

海 旭 今、何時頃?

弟子一 さつき八時を打ちましたが、あれは二十分すゝんでいます。

海 旭 そう。八つ打つたようだったね。かめ子は？

弟子二 今、お薬を煎じていらつしやいます。

渡 旭 ちア薬はいゝから、もう八時だからと言つて、歸つて貰つてくれたまえ。

弟子一 はい。——先生、外のお方ぢアない。先生のお妹さんです。いつそ西光寺にお泊りを願つて、介抱していただきたいら如何でしょうか？

海 旭 西光寺は夜の八時以後は、一切、女人を近づけない掟だったね。

弟子一 はい、しかし外ならぬ——。

海 旭 西光寺は夜の八時以後は——。(嘆く)

弟子二 先生 歸つていただきます。八時までには歸つていただきますから大丈夫です。

海 旭 そうして、くれたまえ。

弟子一 (泪聲) 先生、お妹さんは、すぐ近所へ、わざと、宿をとつて、晝間だけ先生の介抱に上られるんです。しかし夜は我々の至らぬ男手で……、この寒空に……先生の身軀にもしものことがあつたら、我々は、我々は……。

海 旭 (ゆつくりと) 昔の僧侶には、醫者も、藥も、介抱人もなしで、一人で寺を守つた人が多かつた。しかるに、今の世では……今の世では……。

弟子二 先生大丈夫です。お妹さんには歸つていただきますから、大丈夫です。

海 旭 そうしてくれたまえ。僕は頑固者だね。

弟子一 いゝえ、いゝえ決して 先生……。

M

ブリッジ(オフで) 室に脂粉の香を絶ちて夜半の窓に襟たゞし、梵文、貝葉、秘を開き幽を探りて學海の底に求めし玉光る。

「S・E ある講堂の歡衆の聲、拍手など遠く」

語り手

大正新修大藏經は、大正十三年四月八日、その第一巻を刊行し、昭和七年五月を以て、正續合せて八十五巻の完結を見たのでありました。この世界的學業を記念して、ある大新聞社が莫大な賞を贈りました。文學博士高楠順次郎が、その業にたゞさはつた者全員を代表して、賞の授與式に出席し、式が終つて、記念講演のさなか、高楠博士は一片の通知を受けとりました。それこそ實に昭和八年一月二十五日でありました。

M

ブリッジ(短かく、悲痛に)

高 楠 渡邊君！ おい、渡邊君、しつかりしてくれ。

弟子一 (泣きながら) 高楠先生！ 先生は、先生は意識不明です。意識不明？ そ、それぢアもう、渡邊君は、もう駄目なのか、助からないんですか？

弟子一 (泣く)

高 楠 大變なことになつた。取り返しのかねぬことになつた。おい渡邊君、しつかりしてくれ給え。

弟子一 先生——。

高 楠 日本の佛教界にとつて一番大切な人を、一番必要な人を、こんな若さで何と言ふ……何と言ふ……。

弟子一 先生——。

高 楠 (ゆつくりと) 渡邊君、僕は今、大藏經の賞を受けてきたよ

……君に代つて、君と僕とも、思えば長い道伴れだつたね
……大正十一年から、昭和七年まで……十一年も一緒に仕
事をして來たんだ……。

音楽が這入つてくる。

M
高楠

君が増上寺の三大蔵を見てくれれば、僕が宮内省と聖護院
の大藏經を見る、僕がいなければ、君がいなければ、大正
新修大藏經は出来はしなかつたんだ。その君が大藏經が出
來たと思うと倒れる。

因縁とは言い切れんよ。あゝ、君はもう僕の言うことが解
つてくれんのか、そして返事もして貰えんのか。

君のあの吃り聲をきくことはできんのか。何という。何と
いう儚ないことだ……。おい、渡邊君……。

弟子一

(泣きながら) 先生！ 高楠先生、もう、もう何にも言は
ないで下さい。でなくとも、我々はもう胸がかきむしられ
るようで……。

M
(やゝオフで)

思は深し深川の、淨利、君の西光寺、都門の慶は深くとも
妙境、別に風清く月も澄みけん西光寺。……

胸像があります。その胸像には、海旭の歿年月たる、昭和
八年一月二十六日六十二歳という文字が刻んであります。

それは、芝中學校の職員、生徒達の胸ににうちには、渡邊
先生は、とこしえに生きているからだそうです。肉體は亡
びてもその魂は永遠に學校と共にある。

M

床しい感化ではありませんか。
合唱

日輪西に傾むきて

鼓の如く大空に

燦爛の光放つとき

紫磨黄金のおゝいなる

影に伴ふ師を思う

ア
ナ

知切光歳作 光を掲げた人々

新らしい時代の聖者、渡邊海旭を終わります

維持會員募集

一、維持會員 五百名

一、維持會費 一ヶ年金五百圓

一、特典 本會發行の諸印刷物は發行毎に一部宛御

寄贈申します。又色々の御依頼には優先
的に御奉仕致します。

一、申込方法 葉書に維持會員申込みとして、住所、氏

名明記してお出し下されば、會費清算の
上御通知致します。

芝園だより

◎終戦後早くも六年の歳月が流れた。その「自由」學校六年生卒業といういみでは、なるほど、マ氏のいう如く、精神年齢十二歳であるかも知れない。しかし、我々は二千年の國の歴史を持つてゐるが同時にそれは日本に育つた佛教の年齢でもある。それを負うて我々は立つてゐるのだ。只に、古く長いというだけでなしに、いろいろの發展を遂げて來てゐるのであるから、アメリカにない立派な年齢だと思ふ。不屈の精神と獨立自主の心を持つべきであらう。ララのミルクばかり飲んでゐるのが能ではない。今尚、イギリスは、ミルク、さとうを配給制度の下に置き「飢餓輸出」を行つてゐる。自主を取り戻さんがために齒を喰ひしはつて努力する忍耐を學ぶべきである。

◎對世界性、對社會性といふ點では、尙十二歳といわれて勉強します。

ければならぬであらう。

◎夏の夜空に、ばあつと上る花火一夜二百萬圓だ五百萬圓だという素晴らしい研を競うのを見てゐると、戦争中のことを思つて夢のような氣がする。花火は一發彈いて萬人を楽しませるが、今、朝鮮では火彈一發閃めいて萬人が苦しんでゐる。人を殺す目的のキラ作戦も、人命を手段とする人海作戦も、甲乙なき悲しい争である。日本は本當に平和の台となりたいものである。

◎八月號は、讀物を主として編集した。寛いだ氣持で讀んで頂けると思ふ。眞野先生の淨土教の本質は待望久しきものであつた。不明瞭に流れやすい昔ながらの話と違つて明快平易に依るべき所を示す燈火とならう。

◎足立氏筆、「勇猛」の如き隠れた念佛行者は、今後、どしどし紹介して頂いて載せたいと思ふ。そのうち機を見て誌上に發表いたします。

◎本紙は、出版界歩調を揃えて値上げの狀勢の中に、減頁もせず、値上げもせず頑張つております。誌代を切らさぬようお願いいたします。

◎十月初旬、いよいよ本年度の教學大會が宗務所で開かれ、全國各地から研究發表者が集う。サンフランシスコの講和會議も済み、一段と言論の自由が身にしみて嬉しい秋である。

◎此頃、ちよいと讀者の方で事務所へ上京の序でに立寄られる方がある。大へんなつかしい。十年來の讀者だという方も見える。なるべく御面接の機會を得てお話し合いたしたい。

◎七月は、相當用意したお盆のトラクトが、たちまちにして賣切れ御豫定された方には申譯けありません。

◎藤吉氏は九月上旬インドへ出發ベナレス大學に於て、研學されることとなつた。戦後初の日印交流である。御健康を祈る。(前田)

入會・繼續御送金について

會費半年分一三八圓、一年分二七八圓を、なるべく安全確實な振替で御送金下さい。たゞ誌代を振替用紙に所定事項を書いて窓口へお出しになるだけでよいのです。用紙裏の通信欄には、新規・繼續を明記して下さい。

「淨土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年七月廿五日印刷
昭和廿六年八月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼
發行人 眞野 正 順

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都港区芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつゞけられる著者が想を練り、思いを新たにして、信仰の眞實なる姿と之れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新しい思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十六年七月廿五日印刷 昭和二十六年八月一日發行

第十、七卷

第八號

定價 金貳拾圓(送料)

既刊浄土トラクト

お十夜の話	藤田寛雅著	賣切
お盆とおせがき	佐藤密雄著	賣切
お彼岸の話	竹中信常著	殘少四圓

トラクト送料九部以下六圓、十部以上十二圓、十部増毎に六圓増、但し五十部以上、五〇〇キロメートル以内三十五圓、千キロメートル以内四十五圓、千キロメートル以上五十五圓、百部以上本會負擔

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

浄土 九月號 二〇圓

隨想

吉田絃二郎

浄土信仰の本質

眞野正順

彼岸の話

佐藤密雄

彼岸談話

中村康隆

★其他清新なる讀物充實

九月は彼岸にそなえて編集がされてあります。お彼岸の施本に本誌を御利用下さい。多數の時は前以つて豫約ありたし、御相談に應じます。